都市研究プラザ・特別研究員(若手)年次合評会

2015年 9月 17日

在日コリアンの歴史資料発掘キャンペーンの意義と資料の活用方法に関する研究

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員

孫 ミギョン

1. 研究の背景

歴史とは人類社会の変遷や興亡の過程或いはその記録を称する。20世紀以前までこのような興亡の過程やその記録は、社会の重要な意思決定を担ってきたものと認められた主流社会や支配層の立場から記録されてきた。ところが、最近では主流社会から排除されていた民衆が歴史の主役として登場し、彼らの「ライフヒストリー・生活史」が学術的に注目されている。民衆の生活史に注目する理由は、歴史というもの自体が一人一人の個人の生活史によってダイナミックにお互い影響を交わしながら、社会全体はもちろん国際・国内・地方レベルに至るまで相互作用により生成されるからである。すなわち、個人は歴史により作られるだけではなく歴史を作っていく主体(오명석、2002)である。このように学術的に個人史が注目されている理由は、全体歴史の中からも各個人史は公的な文献には記録しがたい「生々しい歴史」特に「ミクロ的資料」としての価値(中野卓著作集生活史シリーズ1巻、2003)を持つからである。

在日コリアンは「歴史性」を持つ存在であるという意味から韓国はもちろん日本でも重要な位置を占めている。1世が殆ど生存してない中、2世の高齢化も進んでいる。在日コリアンの資料収集は「口述を介して伝わらなければならない経験や記憶が忘却の闇に素早く死滅していく現実に対し緊急性」[1]を要する(정혜경、2015)。

韓国内においてこの在日コリアンの研究は、特に2000年以来多様な学問分野から行われている。しかし、彼らの日常生活史やそれに関連する資料の発掘は学界はもちろん政府次元の支援も活発に行われてない状況である。このような状況のなかKEYが推進した「在日コリアン家庭に眠る歴史資料発掘キャンペーン」事業は、日本を拠点にする民間団体と韓国研究機関の支援のもとに実施されたプロジェクトである点では大きい意義があると考えられる。

従って、本稿の目的は、2014年度韓国学中央研究員の支援を受け実施された「在日コリアン家庭に眠る歴史資料発掘キャンペーン」事業を通じて発掘された資料の紹介や事業意義および今後の資料活用を模索することである。

2. 事業概要および事業意義

韓国学中央研究院は、周辺国による歴史歪曲に専門的に対応したり、或いは、韓国歴史や文化資料の開発・配布に参加する民間団体、学会、オンライン、その他のマルチメディアを介して韓国を広報し、韓国に関連する情報の誤謬を是正する国内・外民間団体や学会、研究機関を選定し予算を支援している。KEYは2014年度韓国学中央研究院の支援を受け「在日コリアン家庭に眠る歴史資料発掘キャンペーン」を実施した。この事業により総71点のデータを収集した。資料収集は、主にKEYのメンバーにより自分の家族や親戚を中心に行われた。それぞれのケース別内容においては、当日発表する。

この事業の成果は大きく二つに分けられる。

第一、広義的意味では、コリアンディアスポラ研究における「個人史・日常史・生活史」部分の基礎史料の確報である。歴史記録から排除されてきた民衆の史料は、既存資料を補完するとともに単一・短編的にされがちのコリアンディアスポラ研究をより多様（多様性）、細密（細密性・正確性）に歴史的事実を把握する基礎史料として活用可能である。

第二、狭義的意味では、在日コリアン内部社会に与える肯定的効果である。資料を提供する在日コリアン1世や2世らは、このような自分達の家族写真が資料として何の価値があるか分からないが、役に立つなら喜んで提供する、と。そして、聞き取り調査に参加したKEYのメンバーらはお祖父さんやお祖母さんが日本に渡日してきた経緯や話を聞くことで改めて自分のルーツについて考える貴重な経験になったという3世が多かった。

3. 資料の活用方法

1次的に蓄積された資料の活用に関しては「川崎在日コリアン生活文化資料館」がいい事例である。川崎在日コリアン生活文化資料館のサイバー博物館は、川崎地域に関する基本的な情報、写真などが見られる展示室とハルモニ・ハラボジのコーナー、記録展示室、資料室に分けられてある。 特にこのサイバー博物館は、川崎在住の在日1世の口述やそのデータが口述者の名前、性別、渡日過程など各テーマ別に内容がまとめられている。また、徴用、戦争中、敗戦直後、外国人登録などの項目をクリックすればもっと多様な関連写真を見ることができる。

川崎在日コリアン生活文化資料館のようなサイバー博物館は資料のアーカイブにおいては意味がある。しかし、アーカイブされたそれぞれのデータを関連情報別にネットワーク化し知識化するには限界がある。就いては本稿でそれぞれのデータをより様々に活用するために「知識マップの構築」を提案する。知識マップとは量的に増加した情報の質的な変化を模索する方法論の一つである。知識マップの概念は、資源の発掘から活用に至るまでデータ―情報―知識の3段階に分けて最終的には知識化された情報を意味する。知識マップ

は、既存のデータ中心の個別化された情報から情報間とのネットワークを構築し、一つの情報を関連性が高い他の情報と繋いで提示してくれる。このような知識マップの構築は、情報の好循環流通や管理環境を構築し、分野別に多様な情報を意味関係にまとめて新しい付加価値を創出できる方法である(한국문화정보센터、2013)。 現在、韓国の文化財庁における文化遺産デジタルハブがいい事例である。それぞれの文化遺産が時代―地域―類型―種目などに繋がって情報や知識の形で利用できるようになっている。

知識マップは、統合された資源の知識化を介してデータの価値を増加させる。また、知識化のプロセスを通じて相互関係性が高い情報と繋いでそれを組織し、最終的には知識構図をネットワーク化したマップの形に表現する(한국문화정보센터、2013)。言い替えれば、知識マップは単なるアーカイブ化されたデータを分類し、価値ある情報として転換させる一つの方法論として意味がある。故に、今後、コリアンディアスポラ研究において蓄積されたデータをこのような知識マップの形に活用する方法は積極的に検討するべきである。

参考文献

中野卓著作集生活史シリーズ1巻(2003)「生活史の研究」』 東信堂刊 pp. 68.

오명석(2002)「한국생활문화사를 위한 제언」『생활사 연구의 방법과 과제』한국문화인류학회 제8차 워크숍 발표논문집 pp. 13-14.

정혜경(2015)「구술사-기록에서 역사로-」 『韓日民族問題研究』 第28号 pp. 231.

한국문화정보센터(2013) 『「문화정보 관리・유통체계를 위한 지식맵 서비스 연구」 pp. 74。

韓国学中央研究院https://intl.ikorea.ac.kr:40666/korean/portal.php?sid=6ad23944cb16e11ed30325cd0cec7c5c

川崎在日コリアン生活文化資料館 http://www.halmoni-haraboji.net/